

「律法の成就者イエス」(要旨)

聖書箇所：マタイ 5:17~20

【1】 律法学者やパリサイ人にまさる義

私たちは社会生活を送るために、さまざまな規則を守っています。主イエスの時代のユダヤ人も、守るべき規則がありました。モーセの律法をはじめとする「書き記された律法」(トーラ)です。「律法学者やパリサイ人」は、律法(トーラ)を解釈し、日常への適応のため「口伝の律法」(ハラカ)を教えました。彼らは生活の細部に及ぶ規則をつくりました。それらを守ることによって、神の前に義と認められると教えました。ところが主イエスは私たちに、律法を守る代名詞のような「律法学者やパリサイ人」にまさる義をもつように言われました。

【2】 イエスの教える義

イエスは、これまで人々の間で共有されてきた幾つかの律法について言及しました。「昔の人々に対して、『…』と**言われていた**のを、あなたがたは知っています／聞いています。」その上で、ご自分の解釈を明らかにされました。「…しかし、わたしはあなたがたに言います」。過去の誰かの引用ではなく「わたしはあなたがたに言います」と、ご自分の権威に基づいて律法を説き明かされました。

▶イエスの「反対命題」(5章 21節~47節)

- (1) 「殺人と怒り」について(21~26)
- (2) 「姦淫」について(27~28)
- (3) 「離婚」について(29~32)
- (4) 「誓い」について(33~37)
- (5) 「法的な権利」について(38~42)
『目には目を、歯には歯を』(同態復讐法)
- (6) 「愛」について(43~47)

生活している中で「どこまでなら許されるか?」「どこまでだったら罪に定められな

いのか?」と考えることはないでしょうか。

「律法学者やパリサイ人」は、「どこまでだったら…」の問いに答え続けました。規定をつくり出し、それを外形的に守ることを熱心に教えたのです。ところが彼らは、人のうちに住む罪の問題には無頓着でした。そもそも「どこまでだったら…」という問いこそ、人が「罪の下にある」(ロマ 7:14) ことを物語っているのです。カルヴァンは「ユダヤ人の大多数は律法を信じている振りをしていただけでも、不敬虔で、墮落しているのを、イエス・キリストは御覧になっていた」(J. カガヴァ『共観福音書』新教出版社)と解説しました。

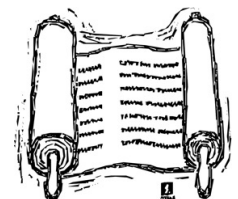
主イエスは、人は心の内側から変えられる必要があると教えました。

【3】 恵みとして与えられる義

イエスの教えを聞いた者たちの中には、その教えが「聖書」(律法と預言者)を軽んじていると思う者もいたようです。それに対して、イエスは次のように述べられました。「(聖書を)廃棄するために来た、と思っ

▶マルキオン (AD.80-155) が陥った過ち
イエスの教える「義」を自分の努力によって到達しようとするならば、到達を困難にさせているように見える聖書箇所を削除したり都合よく曲解する誘惑にさらされます。

▷私たちが真に聖書に聴くならば、神の御前に、心貧しくされ、へりくだらざるを得ません。「律法学者やパリサイ人」にまさる「義」は、恵みとして与えられるものなのです!



¹ (1)-(6)の命題は、(R.T. フランス『ティンデル』)を参照